

萩原朔太郎の「犯罪」詩群の問題

－「浄罪」と「犯罪」のモチーフ

黄 珍*

(e-mail : jinisaku@yahoo.co.kr)

目 次

1. はじめに
 2. 「殺人事件」一派手な一人芝居劇
 3. 「浄罪詩篇」以後の「犯罪」詩群
 - 3.1 酒精中毒者の死
 - 3.2 干からびた犯罪
 - 3.3.1 蛙の死
 - 3.3.2 幼児は神になる
 4. 「犯罪」詩群と「浄罪詩篇」との関連
 5. おわりに
-

1. はじめに

萩原朔太郎の第一詩集『月に吠える』には「犯罪」をモチーフにした詩が四つある。「雲雀料理」章に収録された「殺人事件」と「かなしい月夜」章に収録された「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」である。「犯罪」詩群とも言うべきこれらの詩には、殺人という具体的な事件があり、加害者と被害者が共存している。「犯罪」詩群の初出雑誌と発表年月、原題等を整理すると次のようになる。

- ① 「殺人事件」 (『地上巡礼』大正三年九月)

* 인제대학교 일어일문학과

- ② 「酒精中毒者の死」 (『詩歌』大正四年六月、原題は「酒精中毒者の死体」)
- ③ 「干からびた犯罪」 (『詩歌』大正四年六月)
- ④ 「蛙の死」 (『詩歌』大正四年六月)

「殺人事件」の発表は大正三年九月で、「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」の三篇の発表は大正四年六月である。これらの詩はいずれも殺人事件を詩材として扱っている。しかし、「殺人事件」と、「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」の三つの詩には、詩情にかなりの差が感じられる。「殺人事件」と三つの詩の発表の間には約八ヶ月の隔りがあるが、それだけでこれらの詩に認められる詩情の差を説明するには無理がある。

「殺人事件」発表から三つの詩が発表されるまでの約八ヶ月間は、「浄罪詩篇」が書かれていた時期でもあった。「浄罪詩篇」は、初出の末尾に〈一浄罪詩篇一〉と付記がある詩や、「浄罪詩篇ノオト」にその草稿が見られる詩を指す。制作期間は、大正三年末から大正四年初頭にかけての約三・四ヶ月であると推測される。

本稿では『月に吠える』に収録された「犯罪」に関する四つの詩を分析する。さらに、「浄罪詩篇」を挟んでその前後の時期に「犯罪」詩群が発表されていることを手がかりに、「浄罪詩篇」の詩情が「犯罪」詩群とどのように関連しているか、また「犯罪」詩群に認められる詩情の差、その原因がどこにあるかについても考察した。

2. 「殺人事件」一派手な一人芝居劇

大正三年九月『地上巡礼』創刊号に発表された「殺人事件」は、朔太郎によって最も早い時期に書かれた口語自由詩として知られている。

先行研究には、「殺人事件」は「朔太郎のえがいた生理的幻想の殺人事件」であるとし、「じぶんの恋人がすでに他人によって性的に奪われたのを追跡してゆく」という「現実的な意味」と「性的な願望」の立場に立った吉本隆明論や²⁾、「殺人事件」には一種の「怖くない悪夢」の世界が投影されているとする吉原幸子論がある。³⁾ また、福田清人は「朔太郎自身探偵であり、殺人者であり、恋人を殺された男の三役を演じるという設定」「優雅な殺人を犯したダンテ的な曲者」などと述べている。⁴⁾

厳密に言えば「殺人事件」は『月に吠える』に収録されたものの、習作期の性格を持つ「愛憐詩篇」期に含まれるべき作品である。『月に吠える』の主な流れから少々離れ

2) 吉本隆明 (1962) 「萩原朔太郎—その世界—擬制の終焉」『擬制の終焉』現代思潮社、182頁。

3) 吉原幸子 (1978) 「殺人事件」『国文学解釈と教材の研究』学灯社、86頁。

4) 福田清人 (1967) 『萩原朔太郎 人と作品』清水書院、112頁。

た詩風をもつ詩であると言える。

「殺人事件」の初出の末尾には〈一九一四、八、一二〉の付記があり、初出の原詩と『月に吠える』に収録された際の詩を比較してみると、いくつかの修正が見られる。

初出では第一連の〈つめたいきりぎりすが鳴いて居る、〉のあとに、〈九月上旬(はじめ)の殺人。〉の一行がある。また、第二連の最初の行も初出は〈九月上旬(はじめ)のある朝〉となっているが、『月に吠える』への収録の際は〈しもつき上旬(はじめ)のある朝〉と修正されている。

〈九月上旬(はじめ)〉が〈しもつき上旬(はじめ)〉に変わった経緯については、〈九月〉を陰暦の仮名に変える時にながつきと書くつもりが、〈しもつき〉にしてしまったとも推測されるが、大岡信は次のように述べている。

「玻璃の衣装」、「晶玉」の床、「まつさをの血」などの、まことに彼好みの素材に一貫している冷たさ、透明さ、貧血症的昂揚感に最も適う季節として、ここでは霜月以外にありえないのを直覚した。(中略)透明な怪盗による殺人事件は、まだ夏の火照りが残って血がざわめいている「九月上旬」では、彼の美感に照らして恰好がつかなかった。5)

大岡は、朔太郎が〈九月〉を〈しもつき〉に変更したのは、「殺人事件」の詩情に「つめたい」質感を一層高めるための工夫であったとしている。すなわち、詩人の制作意図による詩語の選択であったことである。朔太郎の「美感」には、〈玻璃の衣装〉〈晶玉〉〈まつさをの血〉に最もふさわしい季節として〈九月〉よりは、〈しもつき〉のほうが適していると「直覚」したのである。

「殺人事件」という題目からも窺えるように、この詩は殺人事件を詩材にした作品で、恋人の女が自分の部屋で殺されたという設定で始まっている。人が殺されたという事件性だけをみれば、「殺人事件」は非常に恐ろしく不気味な詩になるべきである。しかし、この詩は透明感あふれる詩語により、青く澄んだ秋の空が連想され、爽やかで不思議な魅力を醸し出している。

「殺人事件」は浅草の活動写真から生まれた詩であることがよく知られている。この詩は、あたかも活動写真を見ているような気分を読み手に与えるが、それは、作者が当時見たであろう地味な色ではなく、非常に鮮やかな色の活動写真である。その場面の風景や事物の感覚までが実感として湧いてくるような詩であると言えよう。

殺人事件

とほい空でびすとるが鳴る。
またびすとるが鳴る。

5) 大岡信 (1981) 『萩原朔太郎』筑摩書房、134頁-135頁。

ああ私の探偵は玻璃の衣装をきて、
 こひびとの窓からしのびこむ、
 床は晶玉、
 ゆびとゆびとのあひだから、
 まつさをの血がながれてゐる、
 かなしい女の屍体のうへで、
 つめたいきりぎりすが鳴いてゐる。

しもつき上旬(はじめ)のある朝、
 探偵は玻璃の衣装をきて、
 街の十字巷路を曲つた。
 十字巷路に秋のふんする。
 はやひとり探偵はうれひをかんず。

みよ、遠いさびしい大理石の歩道を、
 曲者はいつさんにすべつてゆく。

遠い空でピストルが鳴り、また、ピストルが鳴る。この二発の銃声から「殺人事件」は始まっている。二発の銃声は、事件の発生であり、事件の完成でもある。

〈とほい空でびすとるが鳴る。／またびすとるが鳴る。〉、これは単に遠い空でピストルの音がしたというだけではなく、ピストルが鳴った瞬間、その銃声が遠い空にまで鳴り響いていったことを表しているようである。すなわち、たちまち遠いところまでピストルの音が広がっていったイメージが自然に思い浮かんでくることから、〈とほい空〉は、おそらく青く高く澄んでいる秋空であろう。

語り手の視線は、ピストルの音が鳴り響く遠い空から徐々に事件が起こった場所へと近づいてくる。そして、殺された恋人をクローズアップする。面白いのは、語り手の視線に伴って〈探偵〉も〈玻璃の衣装〉を着て、恋人の〈窓〉から忍び込み、事件の現場に登場したことである。

恋人の部屋の〈床〉には〈晶玉〉が散らばっており、恋人が殺されている。横たわっている恋人の指と指の間から〈まつさを〉な血が流れ、その死体の上では〈つめたいきりぎりす〉が鳴いている。

一般的に探偵とは、「ひそかに他人の事情や犯罪の事実などをさぐる」⁶⁾人のことで、他人の秘密を調査したり、罪を犯した者を突き止めたりするのが主な仕事である。秋晴れのある日、事件が起こり、その現場へやって来た私の〈探偵〉もこの範疇に入るであろう。事件が起り、〈探偵〉が登場するのは、探偵小説やミステリ映画ならありふれた場面である。しかし、「殺人事件」に登場する〈探偵〉は、本来の探偵からは微妙にずれてい

6) 新村出編 (1992) 『広辞苑第四版』岩波書店、1633頁。

る。常識からかけはなれた感じの〈探偵〉と言えるだろう。

〈探偵〉は〈玻璃の衣装〉を着ている。〈玻璃〉は水晶や硝子のことであるから、〈玻璃の衣装〉は透明な秋の青空が映るような衣装のことである。〈探偵〉は、秋の青空とその透き通った感覚までが伝わってくるような〈玻璃の衣装〉を着て、恋人の部屋へと忍び込んでいるのだ。

大岡は、「この探偵は、「玻璃の衣装」を着て透明人間になり、窓から忍び入ってたった今彼女を殺した張本人ではないか」とし、〈探偵〉が「透明人間」になって、〈窓〉から忍び入ったとしている。⁷⁾大岡が語る「透明人間」は、その姿は見えなくても身体は持っているはずである。しかし、〈玻璃の衣装をきて、／こひびとの窓からしのびこ〉んだ〈探偵〉からは、全くその身体が感じられない。〈探偵〉は、あたかも〈窓〉のドアを開けることなく、透き通った〈窓〉ガラスをそのまま透過するようにして忍び込んでいるのだ。

要するに、〈探偵〉は秋の日に恋人の部屋へとやって来た密かな侵入者である。その登場の仕方も不思議な〈探偵〉である。

大岡が〈探偵〉を〈玻璃の衣装〉を着た「透明人間」として語ったのは、〈玻璃の衣装〉と「透明人間」のイメージを同一な物として捉えたからであろう。この詩が活動写真の一場面のような語り方であることを指摘した。カメラのレンズの透明さと〈玻璃の衣装〉の透明さがイメージ的に合致しているからである。透明なカメラのレンズが風景を映すように、透明な〈玻璃の衣装〉を着た〈探偵〉の視線により、恋人の部屋の風景が映されている。語り手の視線は〈探偵〉の視線と重なっているのである。

恋人の〈窓〉から忍び込んで恋人の部屋を語り、〈秋のふんすゝ〉と〈曲者〉を語る〈探偵〉は、〈殺人事件〉を仕掛けた人物でもある。〈私の探偵〉は〈私〉が雇った〈探偵〉ではなく、〈探偵〉の〈私〉である。恋人も〈私〉の恋人である。〈遠いさびしい大理石の歩道を、〉〈いつさんにすべつてゆく〉曲者も、〈私〉の分身である。「殺人事件」は、密かな侵入者が演じる派手な一人芝居劇であったのだ。

では、霜月のある朝、〈玻璃の衣装〉を着た〈探偵〉が感じる〈うれひ〉とは、どんなものであろうか。

大岡は、〈探偵〉が〈うれひ〉を感じる理由は「愛する者をつい殺さねばならなくなった者の憂愁」であると述べている。⁸⁾しかし、恋人の部屋の様子を語る〈探偵〉の視線には恋人への想いが全く感じられない。殺された恋人は、部屋の一風景として淡々と描かれているだけである。恋人の死と〈探偵〉の〈うれひ〉を結び付けるには無理があり、大岡の「憂愁」は悲しみの感情で、〈探偵〉が覚える〈うれひ〉とは明らかに違う感情である。

この詩は殺人という怖い出来事を詩材にしているにも関わらず、その詩情には清涼感が

7) 大岡信 (1981) 『萩原朔太郎』筑摩書房、136頁。

8) 大岡前掲書、136頁。

あり、美しく透明感にあふれている。それは〈とほい空〉〈玻璃の衣装〉〈晶玉〉〈まつさをの血〉〈きりぎりす〉〈秋のふんすゐ〉など、秋を感じさせる詩語の多用による効果であろう。

〈探偵〉の着ている〈玻璃の衣装〉や〈床〉に散らばっている〈晶玉〉は、透き通った秋の青空をそのまま感じさせる詩語である。また、殺された恋人の死体の上で鳴いている〈つめたいきりぎりす〉も、死体の冷たさを表している。〈かなしい女の屍体のうへで、／つめたいきりぎりすが鳴いてゐる。〉というフレーズは、〈とほい空〉〈玻璃の衣装〉〈晶玉〉〈まつさをの血〉などの詩語と絡み合い、冷めたい死体の感覚を一瞬にして、爽やかに涼しい秋へとその印象を一転させている。ここまで来ると、殺人という事件性は秋の詩語によって一掃され、消滅してしまう。

要するに、「殺人事件」は殺人事件を扱ったのではなく、透明感あふれる詩語を用いて秋の季節感を歌った詩であるのだ。ピストルの音を遠くまで響かせる清明な秋の青空、〈床〉に散らばる〈晶玉〉の破片、恋人の指の間から流れてい〈まつさを〉な血、〈つめたいきりぎりす〉の鳴き声、そして〈秋のふんすゐ〉、このような雰囲気がひととき印象的に〈探偵〉の胸を打ったのではないだろうか。

3. 「浄罪詩篇」以後の「犯罪」詩群

『月に吠える』には「殺人事件」以外にも「犯罪」をモチーフにした詩がいくつかある。「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」である。これらの詩は、「浄罪詩篇」期の前に発表された「殺人事件」と比べて、詩情にかなりの差が見られる。「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」の詩情を探ってみよ。

3.1 酒精中毒者の死

大正四年六月号『詩歌』に掲載された「酒精中毒者の死」の原題は「酒精中毒者の死体」である。〈酒精中毒者(よつぱらい)〉が仰向きに死んでいる。死体の〈まつしろい腹〉からは、えたいの知れないいろいろなものが流れている。〈白つぼけた殺人者の顔が、／草のやうにびらびら笑つてゐる。〉の詩句からは、〈酒精中毒者(よつぱらい)〉が他殺されたことが分かる。

酒精中毒者の死

あふむきに死んでゐる酒精中毒者(よつばらい)の、
まつしろい腹のへんから、
えたいのわからぬものが流れてゐる、
透明な青い血漿と、
ゆがんだ多角形の心臓と、
腐つたはらわたと、
らうまちすの爛れた手くびと、
ぐにやぐにやした臓物と、
そこらいちめん、
地べたはびかびか光つてゐる、
草はすどどとがつてゐる、
すべてがらぢうむのやうに光つてゐる。
こんなさびしい風景の中にうきあがつて、
白つぼけた殺人者の顔が、
草のやうにびらびら笑つてゐる。

死体から流れているえたいの知れない臓物の模様と状態は、この〈酒精中毒者(よつばらい)〉が異様な存在であったことを示している。たとえば、〈ゆがんだ多角形の心臓〉は〈酒精中毒者(よつばらい)〉がかなり歪んだ心理の所有者であったことを語っている。また、〈腐つたはらわた〉〈らうまちすの爛れた手くび〉〈ぐにやぐにやした臓物〉の詩句からは、内臓が腐り、体の一部がただれるほど、酒に〈爛れた〉病人の〈酒精中毒者(よつばらい)〉像が連想される。〈酒精中毒者(よつばらい)〉の死というよりは、苦悩した病人の死であると言えるだろう。

〈白つぼけた殺人者の顔〉だけで、〈酒精中毒者(よつばらい)〉が他殺されたと断定するのにも疑問は残る。〈白つぼけた殺人者の顔〉を〈殺人者の顔〉ではなく、〈酒精中毒者(よつばらい)〉自身として読むことができるのではないだろうか。

〈こんなさびしい風景の中にうきあがつて、／白つぼけた殺人者の顔が、／草のやうにびらびら笑つてゐる。〉から連想されるのは、殺人者ではなく、〈酒精中毒者(よつばらい)〉の〈顔〉である。要するに、〈酒精中毒者(よつばらい)〉は殺されたのではなく、自ら心理的な自殺を図り、決行したのである。

〈白つぼけた殺人者の顔〉は、「地面の底の病気の顔」の原題である「白い朔太郎の病気の顔」の白い〈顔〉ともイメージが重なっている。「殺人事件」で《密かな侵入者》を演じた〈探偵〉が派手な一人芝居をやり遂げたように、「酒精中毒者の死」もその延長線上で読むことが可能だろう。

3.2 干からびた犯罪

大正四年六月号『詩歌』に発表された「干からびた犯罪」は、だいたいその雰囲気は異なるが、内容的には「殺人事件」の続篇のような詩である。

〈いく年〉も前から〈倒れた椅子〉があり、〈凶器〉があり、〈屍体〉があり、〈血〉があり、〈窓〉があり、〈探偵のくらい顔〉があり、〈さびしい女の髪の毛〉が震えている。

干からびた犯罪

どこから犯人は逃走した？
 ああ、いく年もいく年もまへから、
 ここに倒れた椅子がある、
 ここに兇器がある、
 ここに屍体がある、
 ここに血がある、
 さうして青ざめた五月の高窓にも、
 おもひにしづんだ探偵のくらい顔と、
 さびしい女の髪の毛とがふるへて居る。

しかし、〈どこから犯人は逃走した？〉のか、〈犯人〉の姿は見えない。解決されない殺人事件と色彩感のない〈殺人〉の現場だけが〈干からびた犯罪〉として残されている。未解決の犯罪を扱っているという点で、この「干からびた犯罪」は、あの「殺人事件」とつながっているのである。

福田清人は「「殺人事件」の中の「玻璃（ガラス）の衣装」や「晶玉の床」「大理石の歩道」などの、『スバル』調の舞台衣装はなく、『月に吠える』にもっとも特徴的な生理的、神経的な感覚が強調されている。」と、「殺人事件」からだいぶ変わった詩風を指摘している。⁹⁾

「殺人事件」が秋晴れの清清しさに満ちた詩情を持つなら、「干からびた犯罪」は暗い〈探偵〉の内面と〈殺人〉現場を索漠たる言葉で語り、文字通りの〈干からびた〉詩情を醸し出している。

3.3.1 蛙の死

「蛙の死」は大正四年六月号『詩歌』に発表された詩である。『月に吠える』へ収

9) 福田清人(1967)『萩原朔太郎 人と作品』清水書院、111頁。

録される際、〈幼年思慕篇〉という付記が末尾に加えられている。

「蛙の死」は〈子供〉が〈蛙〉を殺した設定になっている。被害者が人間ではなく、〈蛙〉であるから、「犯罪」としては成立しないのかもしれない。しかし、語り手は〈蛙が殺された〉と、〈蛙〉の死を「犯罪」の感覚で語っている。

蛙の死

蛙が殺された、
子供がまるくなつて手をあげた、
みんないつしよに、
かわゆらしい、
血だらけの手をあげた、
月が出た、
丘の上に人が立つてゐる。
帽子の下に顔がある。

幼年思慕篇

「蛙の死」は〈蛙が殺された〉という詩句で始まっている。〈蛙〉を殺したのではなく、〈蛙が殺された〉のであるから、語り手の心情の軸は殺された〈蛙〉に傾いているのだろう。

殺した〈蛙〉を真ん中に置いて〈子供〉たちはまるくなっている。そして、〈かわゆらしい〉〈血だらけ〉の手をあげ、歓声を上げている。〈蛙〉の死骸と血だらけの手を上げる〈子供〉たちの後ろから〈月〉が出る。その〈月〉を背景に、丘の上に人が立っており、その人の〈帽子の下〉の〈顔〉がクローズアップされる。

〈蛙〉の死骸を囲んで血だらけの手を上げる〈子供〉たちの不気味な行為からは、原始宗教の儀式のようなグロテスクな一面も感じられる。

〈幼年思慕篇〉という付記があることから、この詩は詩人の幼い時の「思い出」を題材にしたと推測される。小野隆は「作品末尾の付記〈幼年思慕篇〉が示すように幼年には澁刺としたものがあるはずで、その健康さに朔太郎は〈思慕〉をよせている。」と述べているが、この「健康さ」に〈思慕〉をよせたという箇所には疑問がのこる。¹⁰⁾

「子供の笑顔は天使の笑顔」という言葉もあるように、子どもは純粋な存在である。しかし、子どもというものは残酷な存在でもある。子どもの残酷さは大人のそれとは異なり、善悪の認識も区別もないところにその特徴がある。平気で虫を殺し、ペットなどをいじめながら天真爛漫に笑う。子どものその行動には悪意が感じられない。悪意がないから何もかも平気に出て純真に笑えるのかもしれない。

10) 小野隆 (1982) 「月に吠える」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、67頁。

しかし、〈子供〉に殺された〈蛙〉のように、被害を受ける立場からすると、子どもの残酷な行為に伴う明るい笑顔は恐ろしいかぎりである。〈白つぼけた殺人者の顔が、／草のやうにびらびら笑つてゐる〉ような不気味さが漂う。

前述したように、この詩は〈蛙が殺された〉という詩句で始まっている。なぜ語り手は〈子供〉ではなく、殺された〈蛙〉の立場で語っているだろうか。小野隆が述べているように、この詩が幼年時代の「健康さ」に〈思慕〉をよせる詩であるなら、殺された〈蛙〉ではなく、むしろ〈子供〉の立場で語るべきではないだろうか。

血だらけの手をあげて歓声を上げる〈子供〉たちの笑顔からは、何の悪意も感じられないことを指摘した。もちろん、〈蛙〉を殺した〈子供〉の行為は「犯罪」として成立することもないだろう。〈子供〉にとって、〈蛙〉を殺したその行為は、日常の小さな楽しい遊びに過ぎない。しかし、殺された〈蛙〉側から見ると、その純真無垢な笑顔の裏に隠れている〈子供〉の残酷さほど恐ろしいものはない。善悪の概念も分からず、認識も区別も出来ないからこそ恐ろしいのである。絶対残酷という境地があるなら、子供の残酷さを言うのではないだろうか。

3.3.2 幼児は神になる

朔太郎は「浄罪詩篇ノオト」で「「幼児は神になる。」幼児が幼児として成長するときにはいつかきつと神になる。成人は到底神になれない。」と書いている。¹¹⁾「幼児」には神聖なものがあり、「幼児」が大人にならず、「幼児」のままであればその神聖さを失わないという意味である。結局、人間というものは、大人になると、幼年時代に持っていた神聖さをなくしてしまうのであろう。

旧約聖書の『創世記』二章と三章には、アダムとイブの物語が書かれている。アダムとイブは最初の人類である。アダムとイブは神の言葉に従わず、エデンの園の中央にある「善悪を知る木の実」（以降「善悪果」と表記）を食べてしまう。原罪とは、人間の先祖が犯した最初の罪のことである。すなわち、神に逆らい、禁断の木の実を食べてしまったアダムとイブの行為に由来する。そして、人類最初の罪を犯したアダムとイブは、樂園から追放された。以後、人間は生まれながらに罪を負っているとされた。

子どもは「善悪果」を食べる前のアダムとイブの姿ではないだろうか。神に逆らい、アダムとイブが「善悪果」を食べる前には、世の中に罪というものはなかった。善悪の概念がなかった。彼らがどんなことをしても、その行動に罪を見い出すことはなかっただろう。キリスト教的に考えると、「善悪果」を食べる以前は善の世界のようであるが、実際は善でも悪でもなかったはずである。もちろん、善悪が共存する世界でもなかった。「善悪果」以前は、

11) 『萩原朔太郎全集十二巻』（1977）筑摩書房、5頁。

善悪の概念もないから、人間が善悪を意識しなくても良い世界だったのではあるまいか。

善悪の概念はアダムとイブが「善悪果」を食べた瞬間に生まれた。「善悪果」を食べ、目ざめた彼らは、以前は意識することのなかった自分たちの裸に気づき、羞恥心を感じる。また、善悪の概念を知り、神に逆らったことも悟る。人間に善悪の概念が生まれ、罪が生じた瞬間である。

朔太郎の詩「蛙の死」は、人間の原罪を連想させずにおかない恐ろしさを秘めている。無残に〈蛙〉を殺し、その死骸を囲んで血だらけの手を上げている〈子供〉の姿には、原罪を犯す前のアダムとイブの面影が重なって見える。

しかし、子どももいつかは大人になる。大人になる過程で徐々に物心が付き、善悪の概念も分かり、分別する力も生じる。もしかすると、子どもが大人になるための通過儀礼が「善悪果」の摂取ではないだろうか。

人類史上、「善悪果」の摂取無しに、大人になった者はいないだろう。大抵の大人は、善悪の概念、罪への認識を持つものだ。そしてある日、幼年時代の「思い出」が甦る。物心も付かない頃の、意味も分からずに行った無邪気な行為が、ある瞬間、恐ろしい「犯罪」の「思い出」としてよみがえるのである。

「蛙の死」の最も注目すべきところは、〈蛙〉を殺した子どもたちが〈かわゆらしい、／血だらけの手をあげ〉ているその後ろからのぼる〈月〉と、その〈月〉を背景に子どもたちの行為をじっと見つめている人の存在である。〈月〉がのぼり、〈丘の上〉に人が立ち、〈帽子の下〉に〈顔〉がある。その〈顔〉は〈帽子〉に隠れ、輪郭さえも分からない。

大岡信は「この帽子をかぶっている顔のはっきりしない人物は、殺された蛙自身なのではないのか。蛙を殺した子供らは、丘の上にたちまち顕現した蛙の靈魂の、冷やかで静かな復讐に今さらされているのではないのか。帽子の下に顔のあるこの人物は、子供らに向かって次の瞬間歩み出そうとしているのではないのか。」とし、〈帽子の下〉の〈顔〉を〈蛙〉として解釈している。¹²⁾

しかし、〈帽子の下〉の〈顔〉は、〈子供〉だった人物の大人になった〈顔〉ではないだろうか。〈幼年思慕篇〉という付記が付いてあるが、〈思慕〉と言うにはあまりにも恐ろしい「思い出」である。

4. 「犯罪」詩群と「浄罪詩篇」の関連性

以上、「殺人事件」と「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」を読んでみたが、これらの詩の詩情を比較してみると、その差は明らかである。

12) 大岡信 (1981) 『萩原朔太郎』筑摩書房、142頁-143頁。

「殺人事件」は「殺人」という恐ろしい事件を詩材にしているにも関わらず、透明感あふれる詩語の多用により、実に爽やかな詩情を醸し出している。それに対して「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」の三つの詩は、不気味で索漠とした印象を与える。

「酒精中毒者の死」は、仰向きに死んでいる〈酒精中毒者(よつばらい)〉の姿と〈草のやうにびらびら笑つてゐる〉〈白つぼけた殺人者の顔〉が不気味に描かれているし、「干からびた犯罪」は、色彩感のない殺人現場の風景と〈探偵〉の暗い内面が〈干からびた〉詩語で描かれている。特に「蛙の死」は、殺した〈蛙〉を囲んで〈血だらけ〉の手をあげている〈子供〉の残酷さと、その光景をじっと見つめている〈帽子の下〉の〈顔〉をクローズアップし、〈思慕〉と言うにはあまりにも無惨な恐ろしい「思い出」が描かれている。

なぜ同じ詩材を扱っているにもかかわらず、このような詩情の差が生じているだろうか。

「犯罪」詩群と「浄罪詩篇」はそれぞれ「犯罪」と「浄罪」がそのモチーフで、「罪」を媒介にしている点では類似している。しかし、「犯罪」詩群には、〈殺人〉という具体的な「罪」のモチーフがあり、詩の中に加害者と被害者の面影が強く現れているのに対し、「浄罪詩篇」には、〈懺悔〉の行為はありながら、その底辺にあるべき「罪」への認識が感じられない。「罪」がどのようなものであり、どこから生じるのか、何のために「懺悔」を行うのかなどの「罪」への認識が不明であるのだ。

「犯罪」詩群と「浄罪詩篇」の初出を整理すると、《「犯罪」詩群A→「浄罪詩篇」→「犯罪」詩群B》のような図式が成立する。つまり、「浄罪詩篇」期に得られた詩的成果がその後に書かれた「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」などの詩群に影響しているのである。

ここで注目すべきは、「浄罪詩篇」期を通じて朔太郎が求めていた真の「浄罪」が、得られたのかどうかである。

萩原朔太郎は次のように、「浄罪詩篇」において〈懺悔〉を求め続けていた。

なみだたれ、
 なみだをたれ、
 いまはや懺悔をはれる肩の上より、
 けふれる竹の根はひろがり、
 するとき青きもの地面に生え。 — 「竹」(I)

けふの霜夜の空に冴え冴え、
 松の梢を光らして、
 かなしむもの一念に、
 懺悔の姿をあらはしぬ。

いみじき笛は天にあり。 — 「笛」

ま冬をこえて光るがに、
おかせる罪のしるしよにも現はれぬ。
みよや眠れる、
くらき土壤にいきものは、
懺悔の家をぞ建てそめし。 — 「冬」

遠夜に光る松の葉に、
懺悔の涙したたりて、
遠夜の空にしも白ろき、
天上の松に首をかけ。 — 「天上縊死」

つみとがのしるし天にあらはれ、
ふりつむ雪のうへにあらはれ、
木木の梢にかがやきいで、
ま冬をこえて光るがに、
おかせる罪のしるしよにも現はれぬ。 — 「冬」

あふげば小鳥の巢は光り、
いまはや罪びとの祈るときなる。 — 「卵」

「竹」(I)のくいまはや懺悔をはれる肩の上より、／けぶれる竹の根はひろがり、>、「笛」のくかなしむもの一念に、／懺悔の姿をあらはしぬ。>、「天上縊死」のく遠夜に光る松の葉に、／懺悔の涙したたりて、>とあるように、詩人は「浄罪詩篇」において切実に〈懺悔〉を求め続けているのである。

しかし、詩人は「浄罪詩篇」の最終型といえる「地面の底の病気の顔」で、〈竹〉の現象を〈病気〉として捉えている。

地面の底の病気の顔

地面の底に顔があらはれ、
さみしい病人の顔があらはれ。

地面の底のくらやみに、
うらうら草の茎が萌えそめ、

鼠の巣が萌えそめ、
 巣にこんがらかつてゐる、
 かずしれぬ髪のががふるえ出し、
 冬至のころの、
 さびしい病気の地面から、
 ほそい青竹の根が生えそめ、
 生えそめ、
 それがじつにあはれふかくみえ、
 けふれるごとくに視え、
 じつに、じつに、あはれふかげに視え。

地面の底のくらやみに、
 さみしい病人の顔があらはれ。

〈地面の底に顔があらはれ、／さみしい病人の顔があらはれ。〉とあるように、〈懺悔〉の儀式である〈竹〉の現象を〈病気〉として捉えているのである。〈懺悔〉の意が託されている〈竹〉の現象を〈病気〉として捉えた詩人の認識は、「浄罪詩篇」期を経ても真の〈懺悔〉に達することができなかったことを示している。朔太郎は「浄罪」を得ることなく、「浄罪詩篇」期を乗り越える方法として「浄罪」からの回避を選んだのである。

5. おわりに

『月に吠える』は「浄罪詩篇」期の「浄罪」を脱し切ったところで獲得した詩境を下地にして作り上げた詩集である。以後の『月に吠える』詩篇に「浄罪詩篇」期に獲得した詩的精神が投影されるのは当然である。それに加え、「浄罪」を得られなかったという詩人の負の認識は、「浄罪詩篇」期以後の诗情の流れに大きな影響を与えている。

つまり、「浄罪詩篇」期以後、「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」のような索漠とした詩群が生まれたその背景には、真の「浄罪」に至らなかったという認識が含まれているのである。詩人の負の認識が、「酒精中毒者の死」の心理的な自殺、「干からびた犯罪」の不気味な風景、「蛙の死」の恐ろしい「思い出」として現れたと考えられる。

【参考文献】

- ①吉本隆明（1962）「〈萩原朔太郎—その世界〉—擬制の終焉」『擬制の終焉』現代思潮社
- ②吉原幸子（1978）「殺人事件」『国文学解釈と教材の研究』学灯社
- ③福田清人（1967）『萩原朔太郎 人と作品』清水書院
- ④大岡信（1981）『萩原朔太郎』筑摩書房
- ⑤新村出編（1992）『広辞苑第四版』岩波書店
- ⑥小野隆（1982）「月に吠える」『国文学解釈と鑑賞』至文堂
- ⑦『萩原朔太郎全集十二巻』（1977）筑摩書房

要 旨

萩原朔太郎の『月に吠える』には、殺人という具体的な事件があり、加害者と被害者が共存している詩群がある。本稿では「浄罪詩篇」を挟んでその前後の時期に「犯罪」詩群が発表されていることを手がかりに、「浄罪詩篇」の詩情が「犯罪」詩群とどのように関連しているか、また「犯罪」詩群に認められる詩情の差、その原因がどこにあるかについて考察した。

「殺人事件」は「殺人」という恐ろしい事件を詩材にしても関わらず、透明感あふれる詩語の多用により、実に爽やかな詩情を醸し出している。それに対して「浄罪詩篇」期以後に発表された「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」の三つの詩は、不気味で索漠とした印象を与える。なぜ同じ詩材を扱っているにもかかわらず、このような詩情の差が生じているだろうか。

「犯罪」詩群と「浄罪詩篇」はそれぞれ「犯罪」と「浄罪」がそのモチーフで、「罪」を媒介にしている点では類似している。しかし、「犯罪」詩群には、〈殺人〉という具体的な「罪」のモチーフがあり、詩の中に加害者と被害者の面影が強く現れているのに対し、「浄罪詩篇」には〈懺悔〉の行為はありながら、その底辺にあるべき「罪」への認識が感じられない。「犯罪」詩群と「浄罪詩篇」の初出を整理すると、《「犯罪」詩群A→「浄罪詩篇」→「犯罪」詩群B》のような図式が成立する。つまり、「浄罪詩篇」期に得られた詩的成果がその後に書かれた「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」などの詩群に影響しているのである。

『月に吠える』は「浄罪詩篇」期の「浄罪」を脱し切ったところで獲得した詩境を下地にして作り上げた詩集である。以後の『月に吠える』詩篇に「浄罪詩篇」期に獲得した詩的精神が投影されるのは当然である。それに加え、「浄罪」を得られなかったという詩人の負の認識は、「浄罪詩篇」期以後の詩情の流れに大きな影響を与えている。

つまり、「浄罪詩篇」期以後、「酒精中毒者の死」「干からびた犯罪」「蛙の死」のような索漠とした詩群が生まれたその背景には、真の「浄罪」に至らなかったという認識が含まれているのである。詩人の負の認識が、「酒精中毒者の死」の心理的な自殺、「干からびた犯罪」の不気味な風景、「蛙の死」の恐ろしい「思い出」として現れたと考えられる。

キーワード；犯罪、浄罪、懺悔、透明感、一人芝居、不気味、原罪、

투 고 : 2008. 8. 31

1차 심사 : 2008. 9. 12

2차 심사 : 2008. 9. 27